

2021年度鳴門市人権地域フォーラム(記録)

テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2021年11月19日(金)13:30～15:30

■ところ なるちゃんホール(ボートレース鳴門 メインスタンド1階)

コーディネーター A (T-over人権教育研究所共同代表・松茂中学校教諭)

パネリスト B (T-over人権教育研究所共同代表・八万中学校教諭)

C (2007年度「人権を語り合う中学生交流集会」実行委員)

D (2012年度「人権を語り合う中学生交流集会」実行委員)

《司会者》

只今より、2021年度鳴門市人権地域フォーラムを開催させていただきます。初めに、資料の確認をさせていただきます。(資料を読み上げながら、一点一点会場参加者に対し確認をしていく)また、本日は、手話通訳を、特定営利活動法人『温かい手コラボ』の皆さんにお願いをしております。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、本日のフォーラムは、15時30分を閉会の予定とさせていただきます。また、お手元のアンケートにつきましては、お帰りの際に受付のアンケート回収箱に入れていただきますよう、ご協力よろしくお願いいたします。初めに、主催者を代表いたしまして、鳴門市教育委員会教育長よりご挨拶を申し上げます。

《鳴門市教育長 開会あいさつ》

(会場横で出番を待つ登壇者に一礼した後)皆さんこんにちは。(会場より「こんにちは」)2021年度鳴門市人権地域フォーラムを開催いたしましたところ、鳴門市内はもとより、近隣の、松茂町、北島町、藍住町、板野町、上板町から、多くの皆様のご参加をいただきまして、本当にありがとうございます。深く感謝申し上げます。

新型コロナウイルスの影響により、延期をしておりましたこのフォーラムですが、本日開催する運びとなりました。このような研修の場が、今年度も途切れることなく続けられることを本当にうれしく思っております。

さて、本フォーラムは、人権尊重のまちづくり、人権尊重社会の実現を目指して、『ひとつと』から『わがこと』へ～自己をみつめ 語り 人と人がつながる人権学習～というテーマの下、開催をさせていただきます。フォーラムの持ち方としては、20年近く、A先生にコーディネーターをお願いして、パネリストの皆さんの語りに寄せて、参加者の皆さんが自らの思いを語っていくというスタイルをとっております。本日も3名のパネリストの皆さんをお招きしております。よろしくお願いいたします。

(登壇を待つ4名に向かい、深く一礼をした後)ところで、10月の下旬に、私は松茂中学校の1年生の人権学習を参観する機会がありました。1年生の子どもたちが、クラスメートの前でマイクを握って、家族に対する思いを一生懸命に語っていく。そういう授業でした。

子どもたちが入学した4月以降、松茂中学校の1年生の先生方が、「自己を語る人権学習」という人権学習を積み上げてきたことが非常によくわかる授業でした。当日の学習指導案には、このようなことが書かれておりました。「自己を語る人権学習とは、差別解消のためにどのように生きていくのかを追求していく学習であり、自分自身の内面を語る人権学習である。」と書かれておりました。当日の授業で、子どもたち一人一人が家族に対しての思いを一生懸命に語るにより、それが「わがこと」となり、子どもたち同士が、

クラスメート一人一人が、そのことを語り合っていく時に、子どもたちが変わっていくんだ。そういう子どもたちの姿の変容があるのだということです。

本フォーラムにおきましても、テーマは先程申し上げた通りで、「自己をみつめ 語り 人と人がつながる人権学習」です。自己を語ることを通して、参加者の皆さんが様々な人権課題を「わがこと」として、学び合うこと、そして、人と人がそのことを通してつながっていくこと、そうしたことがこのフォーラムの大きなねらいで、参加者の皆さん、このフォーラムの趣旨を受け止めていただきますよう、どうかよろしくお願いをいたします。

終わりになりますが、本日のフォーラムが、「人権尊重のまちづくり」「人権尊重社会の実現」に向けて実りあるものとして働きますように祈念するとともに、このフォーラムの開催にあたりましてご尽力いただきました関係者の皆様、そして、各市町の人権教育推進協議会の皆様に厚くお礼を申し上げて、あいさつとさせていただきます。本日は、どうぞよろしくお願いをいたします。

《司会者》

それでは、本日の人権地域フォーラムにお招きいたしました講師の皆様方をご紹介します。向かって右側から、本日のフォーラムのコーディネーターを務めていただきます、T-over人権教育研究所共同代表のAさんです。続きまして、パネリストの方々をご紹介します。T-over人権教育研究所共同代表のBさんです。続きまして、2007年度「人権を語り合う中学生交流集会」実行委員のCさんです。最後に、2012年度「人権を語り合う中学生交流集会」実行委員のDさんです。（名前を読み上げられた登壇者が順次席に着く）それでは、Aさん、以後の進行につきましてよろしくお願いをいたします。

《コーディネーター A》

（立ち上がり元気よく）皆さん、こんにちは。今、教育長のM先生の方から話をさせていただきましたが、私は、現在松茂中学校の1年生を担任しています。教職40年目です。チーム担任制ということで、4クラスを日替わりで、均等に人権の学習を積み上げていくという日常があります。

（切々と）子どもたちが、自分の言葉で、自分の中に抱え込んでいること、その中には本当に切ない現実があります。子どもたちは、この4月の入学以来、マスクをずっとした生活で、私は子どもたちの本当の顔を知りません。給食の時にマスクを取った顔を見て、「こんな顔をしとったんやな」という思いになります。子どもたちは、給食の時におしゃべりをする事なく、給食を黙って食べます。掃除の時間やいろんな活動をほとんどしゃべらず、黙々と自分の責任を果たす子どもたちの姿に、本当に胸が熱くなります。この子どもたちと出会えた喜びを本当にかみしめます。

入学当初に、小学校6年から中学校1年へと上がる時、県立の学校を受験した生徒も少なくありません。本当は別の中学校に行きたかったけど、松茂中学校で学ぶことになった生徒たちに、松茂中学校に来て良かったという出会いとつながりをつくってほしいという願いを込めて、4月当初から「自己を語る人権学習」を積み上げてきました。語るということは喜びです。

今回、私は2年前に「T-over人権教育研究所」を立ち上げてくれたB先生と共に、自分自身の思いを語るという人権学習が何を残し、どういう生き方を子どもたちに迫っていったかをお伝えすることで、「ひとごと」から「わがこと」へというテーマに迫っていきたいと思います。

まず、「人権を語り合う中学生交流集会」の実行委員を務めてくれた若い2人が、自分自身をさらけ出した人権学習に対する思いを語ってくれます。その語りや思いに出会うということは、本当に喜びです。今回もチラシの中に、今年の3月に、年度は変わりましたが、B先生が勤務する八万中学校で実施した、学年全体で語り合う、「全体学習」という取組。これは、板野中学校で始まった取組です。今回のチラシの中に

も入っていますけれど、そういう学習を体育館で実施した、その記録。それを徳島新聞が大きく取り上げてくれました。

この新聞記事の中に、40歳になる青年の言葉が出てきます。「同和問題を学ぶということにどういう意味があるか」パワーポイントの画像に「しんじ」が語ったことが出ています。彼が思いを語ったことをこういう記事にさせていただいています。

「しんじは職場での経験を語った。筆箱に『〇〇〇はこの箱に触るな』と書かれていた。地区出身の当事者の心情を逆なでする差別用語だった。『悔しかった』と振り返るとともに、『こういう差別に直面した時に、中学校での人権学習がすごい糧になった。書いた人に自分の口で『これはおかしいこと』と説明ができた話し、差別が現実に残っている現状と人権教育の大切さを訴えた。』

私も関わったケースなんですけど、しんじは私が中学1年の時に担任し、3年間つながった生徒です。友人と2人でマジックで書かれた、その「〇〇〇はこの箱に触るな」と書かれた、その文字の入った箱を私のところに持って来ました。その文字は、誰が書いたかはわかっています。同期の社員なんです。それで、「どうする？」と彼に聞いた時に、しんじは「先生、きちっと話をする。きちっとわかってもらおう」という思いを持って語るんですね。

当時結婚を考えていた彼は、この職場でやっていけるんだろうか。この仕事を続けることができるんだろうか。もし、この仕事を変わるようになったら、今の結婚はどうなるんだろうか。そういう、揺れ続けた思いを私たちは共有しました。しかし、彼はそれをきちっと伝え、自分の居場所を見事につくっていきました。

私は、人権教育というのは、仲間との「共感」と「連帯」であり、「信頼」と「尊敬」であり、互いへの「感謝」である。そういう関係をつくっていく営みだと思います。しかし、切ない現実がいっぱいあります。無関心な人間もいます。無知な人間もいます。あり得ない言葉を口にする人間もいます。

今、コロナ禍で、本当に心がすさんでいく厳しい状況があります。(力強く)だからこそ、人間の心を癒しつつなっていく、信頼と尊敬の絆の中で、「生きる」ということを学んでいく。そんな学びが問われていくんだと思います。人権問題を語り合える、「信頼と尊敬の絆」を育てていくために、今、松茂中学校の子どもたちとも、一日一日の教育の実践があります。

当時、松茂中学校は参加していませんでしたが、彼が中学3年になった時に、当時の部落の子どもたちが、板野中学校だけでなく、周辺の仲間とつながっていくという願いの中で、1996年に「部落解放徳島県学習会中学生集会」というのを立ち上げました。その語り合いが多くの学校に普及し、2002年に、それまで学習会に参加した地区の子どもたちの集会であったものが、様々な学校の子どもたちが参加する「徳島県人権を考える中学生集会」へ、そして、2007年からは現在の「人権を語り合う中学生交流集会」となりました。学習会の集会だった時には、松茂中学校の子どもたちが参加することはなかったんですが、私が赴任した5年前から松茂中学校の子どもたちもこの集会に参加しています。

今年の集会は、私は1年生を担当しているんですけど、1年生の子どもたちもたくさん参加してくれました。今年の、「人権を語り合う中学生交流集会」のキャッチフレーズが「尊重しあい 尊敬しあい 手を取りあい～こんな世界に僕は生きる～」ですが、これは、松茂中学校の1年生が考えたキャッチフレーズです。これを書いた彼は、集会の終わった後、「先生、今度はいつあるんですか？」と言いました。「今度は来年の夏だ」と答えると、「それまでないんですか？」と返してきます。彼は、本当にこの会で救われた、この会で力を蓄えた生徒です。今年このポスターも、松茂中学校の美術部の生徒が頑張ってくれて、このポスターが選ばれました。このポスターも松茂中学校1年生の描いたものなんですけど、この1年生の子どもたちの頑張る姿にすごく力をもらいます。

毎年この「人権を語り合う中学生交流集会」には県外からたくさんの仲間が参加してくれるんですけど、今年も、この会もそうなんですけど、コロナ感染症拡大防止の関係で県外からの参加はできていません。こ

の「人権を語り合う中学生交流集会」も徳島県内だけの参加になったんですが、部落問題が語られていく集会になりました。最初に、聞き合わせのこと、身元調査について、男の子が作文に書いてきました。これは、松茂中学校の3年生の生徒なんですけど、校内の意見発表の場で語ったものを、夏休みの「人権を語り合う中学生交流集会」の場で語ってみようかということで、語ってくれた映像を今から観てもらいます。

2021年度 人権を語り合う中学生交流集会 全体会Ⅰ 意見発表①

「部落差別」について

松茂中学校3年

「部落差別」それは、人の心から生まれた絶対にあってはならないものです。現在も地域によっては、根強く残っています。今からそんな「部落差別」について、母から聞いたことを基に、僕が考えたことを皆さんに聞いてほしいと思います。

僕は、A先生に誘われ、「中学生人権交流集会」に参加しました。そこではさまざまな人権問題に対して、真剣に中学生が語り合う姿がありました。そのことをリビングで両親に話をしているときでした。部落差別についてのことを僕が話をしていると、母が次のようなことを教えてくれました。

「私とお父さんが結婚するとき、お父さんの両親は、私がどんな人なのか近所の人に聞きに来ていた。」

とここまで話は、なんとなく納得がいったのですが、次の瞬間、その納得は消え失せました。なぜかという、

「聞き合わせをする人の中には、部落ではないかと近所の人に質問する人もいる。」

と話していたからです。その話を聞いたとき、

「なぜ部落出身なのかを聞く必要があるのか」

という疑問がわいてきました。それと同時に、

「部落出身だったら何か問題でもあるのか」という少し腹立たしい気持ちになったのを今でもしっかり覚えています。

僕の祖父母は、部落に対して差別意識があったわけではありません。昔は、それが普通だったと言います。ただ、祖父母は慣習にしたがって聞いていただけだったのです。

昔の人たちは、部落について人一倍敏感で、部落について気にしすぎていたのではないのでしょうか。だからこそ、その間違った考え方を浄化するために、若い僕たちが、正しい知識を身につけて、古くから残る差別をなくしていかなければなりません。

しかし、それは決して容易なことではありません。昔から根強く残っているものは、私たちの常識に定着してしまっている部分があります。そういった間違った常識をなくすためにも一人一人が人権学習を通して、よい人権感覚をもつことが大切になっていくと思います。

僕の父方の両親の世代のように「部落」に対して間違った常識を教えられて育った人たちも、世の中にはたくさんいるでしょう。けれども、その人たちを悪として見てはいけません。祖父母の世代の人たちは、慣習にしたがっていただけであり、本当に悪いのは、そういった慣習だと思うのです。そんな慣習を生んでしまう、人の心が悪いのです。そんな心と一人一人が向き合っていくことが大切だと感じました。

差別には、いろいろな種類がありますが、どれも人の心をえぐるようなものばかりです。差別をして人を傷つけた人も、差別をされて傷つけられた人も、心がモヤモヤします。同じ人間なのに、互いを傷つけて、いやな思いをさせる。それは、あってはならないことです。人を見下し、自分を優れた人間だと勘違いする。そういったことが、人の心を汚していくことにつながっていると僕は思います。

これから、さまざまな経験を積んで、僕たちは生きていきます。その中で、生まれた地域や容姿などで人

を見下し、差別をする人と出会うことがあるかもしれません。そんなとき、

「あなたの考えは間違っている。」

と、はっきりいえるような人になりたいです。そのためにも、常識を疑い、間違えた考えをしないように、普段の人権学習に真剣に、そして積極的に取り組んでいきたいです。

僕は、はじめ「部落差別」がどういうものなのか知りませんでした。けれど、学習を進めていくにつれて、人の心の恐ろしさについて知ることができました。もう二度と差別を起こさない。そういう強い気持ちをもって、これから生きていきたいと思います。

《コーディネーター A》

中学生というのは、本当にすごいと思います。どれだけ力ももらいますか。思いが溢れます。感動が湧いてきます。もう1人、おじいちゃんのことを生き生きと発表した中学生がいました。それは、31年前ですが、実は、私もB先生もそのおじいちゃんとなつがりがあるんですね。その作文を聞いた後にわかるんですけど、板野高校で同和教育主事をされていたのがおじいちゃんです。ちょうど板野中学校で全体学習が始まった時の、板野高校の同和教育担当の先生なんですね。そのことが明らかになりました。

その、板野高校の生徒と丸岡忠雄先生の「ふるさと」の曲を作り歌った。その「ふるさと」の詩を朗読したのも板野高校の生徒です。その曲に寄せる人権作文を、思いを込めて作ってくれました。大麻中学校の3年生の生徒です。おじいちゃんのことを語っています。それを聞いていただきます。

2021年度 人権を語り合う中学生交流集会 全体会 I 意見発表②

想いを受け継いで

大麻中学校3年

皆さんは「ふるさと」と聞くとどのようなことを思い浮かべますか。僕にとっての「ふるさと」。それは、家族と一緒に暮らす温かいところ。コウノトリが空高く舞い、その下に広がる田園の景色。まるで未来までのぞけそうなおいしいレンコン。入浴中聞こえてくるネコがけんかをする鳴き声。友と共に汗を流し、バスケットボールを追いかけた日々。次から次へと大切な僕のふるさとがあふれてきます。

人権学習の時間、僕は詩人の丸岡忠雄さんが書いた「ふるさと」という詩に出会いました。丸岡さんの詩からは、吾が子にふるさとの名を堂々と名のらせたい親の願いと叫びが聞こえてきました。そして、詩を読み終えたあと、僕の胸に突き刺さったのは「ふるさとを隠すことを 父はけもののような鋭さで覚えた」という一文でした。“けものような鋭さ”この言葉を初めて耳にしたとき、言葉では言い表すことのできない何ともいえない気持ちになりました。部落差別が丸岡さんをそこまで苦しめるのかと思うと、僕の心っぱいに“差別をなくしたい”という強い思いが広がりました。

その日、家族と夕食を食べながら、学校で部落差別について学習したことや、丸岡さんの詩について話しました。すると、祖父が、

「丸岡忠雄さんのふるさと？ちょうど30年ぐらい前だったかなあ。おじいちゃんはその詩に曲をつけたんだよ。」

と話し始めたので僕は驚きました。夕食後、早速祖父に曲を聴かせてもらいました。4分の4拍子のゆっくりとしたテンポで、全体的に静かな調子ですが、後半は感情の高まりを表すような旋律の動きで構成されていました。メロディーが25小節のため、タイトルは「二十五小節のふるさと」にしたそうです。祖父は、丸岡さんの詩に心を打たれ、自分のできることで部落解放を訴えたいと、何度も手を入れ直し、作曲したそうです。そして、ある町の講演会でも、この曲に想いを込めて歌いました。

この話を聞き、30年以上も前からこの詩が伝えられていたことに驚くと共に、作曲することが大好きな祖父が、この詩に曲をつけていたことや、差別をなくすために作曲に取り組んでいたことに、僕はうれしい気持ちになりました。作曲できる祖父を誇らしく思うと同時に、僕にもきっと何かできることがあると心から思いました。

今、僕が差別をなくすためにできること。それは、人権学習を通して学んだことや感じた自分の想いを家族や友人、周りの人たちに伝え、行動に移すことです。今までの僕は消極的で、自分に自信をもてていませんでした。

そのため、人権学習の時間も自分から意見を伝えることができませんでした。でも、伝えなければ何も変わりません。自分の思いを詩に表現した丸岡さんのように、その詩に曲をつけ、そのメロディーにのせ丸岡さんの思いを多くの人に伝えた祖父のように。僕も変わらなければと心から思いました。

皆さんも、今一度胸に手を当て、「ふるさと」とは何か考えてみてください。楽しかったり、うれしかったりした思い出がよみがえりますか。それとも、悲しかったり、悔しかったりした思い出がよみがえりますか。祖父は「ふるさと」を作曲した30年前と変わらず、今でも差別が残っていることがとても悔しいと言っていました。僕も、部落差別がまだ世の中に残っていることがとても悔しいです。すべての人が自分の大切なふるさとの名を、何の躊躇もなく名のることのできる社会にしていきたいです。そのために自分に何ができるか考え、それを行動に移していきます。

まずは祖父と共に「二十五小節のふるさと」を大麻中のみんなに伝えていきたいです。

最近興味のあるギターを抱えて。

《コーディネーター A》

中学生集会の会場でこの作文を聞いて時、本当に感動したんですね。この「ふるさと」の曲を聞きたいと思ったんですね。それで終わった後に聞いたんです。「おじいちゃんの名前はなんて言うんですか？」と。すると、「Yと言います」と答えました。それを聞いて「ひょっとしたら」という思いになりました。

今日、この会場においでいただいていますか？(会場を確認、Y先生の手が挙がる)ありがとうございます。先ほども話をさせて頂きましたが、ちょうど板野中学校で全体学習が始まった年の、板野町解放文化祭で、この「ふるさと」の詩に寄せた板野高校の舞台発表がありました。詩の朗読は高校生です。ナレーションはY先生です。Y先生を訪ねて行って、「ふるさと」のカセットテープをお借りし、それをCDに落として資料にさせてもらったんですね。今からナレーションの入った「ふるさと」の曲を聞いていただきます。

1990年12月8日(土)

板野町解放文化祭 舞台発表「板野高校」二十五小節のふるさと

会場：板野町町民センター

《BGM 赤とんぼ ハーモニカ演奏》

皆さん！丸岡忠雄という詩人を知っていますか。彼の詩集「ふるさと」を読んだことがありますか。ふるさととは、父母・家族、また友が住む懐かしい。そして、温かいところであるはずです。

しかし、今でもふるさとの名を名のれない人々が、私たちの周りに数多くいるのです。

自分の生まれた「ふるさと」を名のれない人々が、今の日本にいるのです。

ふるさとの山に向かって詠んだ石川啄木のふるさとと違ったもう一つの「ふるさと」があるのです。

丸岡忠雄の描く「ふるさと」は、まさにそのもう一つの「ふるさと」なのです。わが子に「ふるさと」の名を胸張って名のらせたいという親の熱い願いと叫びが聞こえてきます。

《BGM ふるさと ハーモニカ演奏》

“ふるさとをかくす” ことを
父は
けもののような鋭さで覚えた

ふるさとをあばかれ
縊死した友がいた
ふるさとを告白し
許婚者に去られた友がいた

吾子よ
お前には
胸はってふるさとを名のらせたい
瞳をあげ 何のためらいもなく
“これが私のふるさとです” と名のらせたい

二十五小節のふるさと

作詞 丸岡 忠雄

作曲 山口 寿男

“ふるさとをかくす” ことを
父は
けもののような鋭さで覚えた

ふるさとをあばかれ
縊死した友がいた
ふるさとを告白し
許婚者に去られた友がいた

吾子よ
お前には
胸はってふるさとを名のらせたい
瞳をあげ 何のためらいもなく
“これが私のふるさとです” と名のらせたい

吾子よ
お前には
胸はってふるさとを名のらせたい
瞳をあげ 何のためらいもなく
“これが私のふるさとです” と名のらせたい

瞳をあげ 何のためらいもなく

“これが私のふるさとです”と名のらせたい

瞳をあげ 何のためらいもなく

“これが私のふるさとです”と名のらせたい

“これが私のふるさとです”と名のらせたい

“これが私のふるさとです”と名のらせたい

“これが私のふるさと” 名のらせたい

《コーディネーター A》

中学生集会は今年で27年になります。毎年、夏の中学生集会では力が湧きます。差別の現実は厳しいし、切ないですが、それを本当に乗り越えていく関係をつくっていく、絆をつくっていく、その学びはやっぱり財産になっていきます。これから、この「人権を語り合う中学生交流集会」をずっとリードしてくれたメンバーに語ってもらいます。チラシの中の「しんじ」と「はなちゃん」のはなちゃん、私の中ではDちゃんですが…。その「はなちゃん」に今から語ってもらいます。

《パネリスト D》

1 初めて地域の学習会やふれあい教室に参加した小学生の頃

(立ち上がり、ニコニコしながら)「はなちゃん」ことDと申します。よろしくお願ひします。(着席し)まず初めに、私は被差別部落出身の人間です。一番最初に人権学習に参加したのは小学校1年の時でした。何で参加したかと言いますと、地域の学習会に参加させていただきました。なぜその学習会に参加したかと言われると、あまり詳しいことは覚えていないんですけど、まず姉からの強制参加と、あと、まあ地区の人間だからとりあえず行っておこうかなというところから始まりました。学習会では、人権の学習をしたとかではなく、私たちの学年は、小学校で出された宿題をしていました。

学習会というものはすぐになくなって、その後に「ふれあい教室」というものになりました。「ふれあい教室」は、障がいをもった方だったり、差別されてきた方だったり、地域の方の話、そして地域の、「こういう差別がここではあったよ」という話のフィールドワークであったりとか、そういうことを学習してきました。それも、なぜ参加したかと言われると、小学校まで2キロ半ほど私が毎日歩いて行っていたんですけど、遠いですよね2キロ半。「ふれあい教室」に参加すると、帰りの送迎がつくんです。車で学校から家の近くまで送ってくれて、そこから「ふれあい教室」に参加して家に歩いて帰る。それが目的で参加していました。

参加するうちに思ってきたことというのが、自分も被差別部落の出身とはいえ、差別を受けてきたわけでもなく、その時は、まだ家族からも「こういう差別があった」ということも聞かされていなかった時だったので、私も、「ひとごと」だと思いながら参加していました。

2 深いところまで勉強しようと思えた一泊研修

そういう行事への参加や「ふれあい教室」だったり、後は一泊研修というのがありまして、地域の人々と人権学習をしながら、一泊して、カレーを食べて、夜にお菓子を食べてという楽しい行事だったんですけど、そこで、地域の身近な人の話を聞く機会ができました。

その時に、同じ地域の人なので、仲良くしてくれる人もいるし、私をかわいがってくれる人もいる中で、

そういう差別を受けてきたという話を聞いた時に、身近というよりは、差別はやっぱりダメなんだという感情から始まって、そこから、深いところまで勉強しようかなという気持ちになってきました。

小学校の時はずっとその行事に参加してきたんですけど、中学に上がって「育友会」というものになりました。中学生や青年部、学校の先生だったり、地域の方が集まって勉強する場なんですけど、それも参加した理由は、おにぎりとか、お菓子が出るからです。姉も先程紹介いただいたんですけど、中学生集会の実行委員を務めてきて、本当に、半ば強制的に参加をさせられていたという感じではあったんですけど、自分としても、差別の勉強をしていなければいけないなという気持ちが芽生え始めていたので参加していたというのがありました。

3 初めて参加した中学生集会を期に変化した私

中学1年生の時に、初めて私は中学生集会に参加しました。やはり、学校で勉強するよりも、本当にすごく深いところまで勉強して。何が学校と違うかという、学校では生徒って感想しか言わないんですね。自分の気持ちとかも言わないし、「どうですか？」と聞かれて、「差別はダメだと思いました」しか言わないんですね。でも、中学生集会は、本当に深いところまで勉強をして、生徒たちが自分から手を挙げて発言する場でした。そこに参加した時に思ったのが、自分が恥ずかしくなりました。被差別部落の人間であるにもかかわらず、全然この場でも発言できない。中学1年の時は、ちょっと悔しく、その会は終わりました。

そして、中学2年の時は、頑張って発言はしました。でも、何って言うんでしょうか。周りの活気に負けていい発言ができず、中学3年生の時にチャンスが来ました。実行委員の座です。(コーディネーターと笑顔を交わしながら)実行委員にならないかという話を中学の先生からしていただいて、中学生集会は実行委員を務めさせていただくことになりました。

その時には、「マイクを離さんぞ」というくらいしゃべってました。一番しゃべっていたのではないかと思います。実行委員長って、手を挙げたらすぐにマイクが回ってくるわけで、すごいいい場だなと思って参加していました。その中学生集会も実行委員を終わり、同時に「中高校生集会」という、中学生と高校生とを交えた人権学習の場へも参加していました。そこで初めて言われた言葉があって、中学生集会の時は、やっぱり深い話をしていかなければいけないということで、グループワークだったり、そういうことをする中で、「私は被差別部落の人間です」というのを、一番最初に言っていました。それを言う中で見えたのが、言葉を考えながら発言するというのが大事だなと思ったので、まず最初に言わせてもらっていました。

4 中高校生集会で先生から言われた「身元を明かすな」に感じた思い

でも、その「中高校生集会」の時に、私たちのグループの担当をしていてくれた先生が、私たちに言ってきたのが、「自分の身元を明かすな」という言葉でした。「何で？人権を語る集会なのに、いろんな方が集まるにしても、人権の勉強をしに来ているんだから言ってもよくないか」という、私の中で悔しい気持ちというのがこみ上げてきて、その人権の集会に参加していた友だちと、その当時、泣きながら帰りました。すごく悔しかったです。

その集会にも参加していたんですけど、卒業して人権の勉強に参加する機会がなくなってしまって、久々に呼ばれたのが、この映像にあります八万中学校の講演会でした。人権学習というと必ず出てくる話題というのが、「寝た子を起こすな」という話題が出てくるんですね。勉強しなかったら知らずに終わるんじゃないか。無くなっていくんじゃないか。でも、私は、知らないことが本当に怖いことだと思っているんです。

5 友だちとの話の中で実感した無知の怖さ

私が19歳の時にできた友だちで、友だちと話をした中で、お母さんがお父さんと結婚する時に身元を調べ

て結婚したという話を聞きました。それで、それと同時に、私も自分の身元を明かしたら、その友だちと仲良くできないのじゃないかという場面に遭遇しました。

その友だちは、「差別がダメって、差別のことを聞くのは、親から聞いた。おばあちゃんから聞いた」と言うんです。私みたいに被差別部落に生まれて、親が差別にあってきて、「差別はダメ」っていうことで育ってきたのであれば、差別はダメという感覚になると思うんです。

でも、差別を昔からしてきたおばあちゃん、おじいちゃんがいる環境の中で、何も知らないところで、「あの子と遊んじゃダメ」「あの地域の子と遊んじゃダメ」と言われると、それを素直に受け入れてしまうんです。なので、私が一番思っているのは、「勉強しないことは本当に怖いことなんだ」ということです。

八万中学校でもお話させていただいたんですけど、無知なことが一番怖いことだなと思うし、みんなに勉強を勧めています。

6 子どもの親になり、先生方に願うこと

私も実際に3歳の子どもがいるんですけど、やっぱり私が一緒に地域の地域に住んでいるので、その子も被差別部落出身ということになります。私も被差別部落出身だと伝えることを迷ったんですけど、その子が大きくなった時に、どこかで部落差別にあった時に、彼氏ができるような人になってほしいと思って、被差別部落の子であるということと、人権の勉強には進んで参加をなささいということは伝えようと思います。そのためには、やっぱり、先生方の人権に対する姿勢であったり、本当に、生徒の中に被差別部落の子がいるというのは認識していただいて、身近に感じていただいて、日ごろ人権の勉強をしていただけたらなと思います。(照れくさそうにあふれる笑顔で)私からは以上なんですけど、よろしいでしょうか。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございます。子どもたちは、いっぱい言いたいことがあります。思っていることがいっぱいあります。そのことを本当に安心していえる、そういう場があったら伝えていくんですね。今年の中学生集会でLGBTの当事者の子が、自分はそうなんだ、こういうふうに苦しんでいるんだと語りました。そういう場だからいえるんだと思います。そうすると、別の学校の生徒がすかさず手を挙げて、その思いにしっかり応えていくんです。それにまた手を挙げてしっかり応えていくんです。それが、やっぱり人権の学習の喜びだと思うんです。

今年は県外からの参加はありませんから、会場からバンバン自分のことを語っていくということは難しいです。この、県内だけの会場の中で、自分のことをさらけ出すというのは、重たいし、苦しいし、そこまでは行ってませんが、そういう関係になった時に人権学習というのは、本当に喜びになるし、その時間を待ち焦がれるんですね。「先生、次の中学生集会はいつですか?」「次の語り合いの人権学習はいつですか?」それを待ち焦がれているんです。それが生きる力になっていくんです。そういう学びを積み上げていくことが問われていくと思うんですね。

そういう学びを広げていくために、「人権を語り合う中学生交流集会」というのは積み上げられてきたと思います。B先生の一番弟子の若者です。本当にいろんな体験をして、5月に『大人のための』人権を語り合う『T-overの会』というのを開いたんですね。この会を開いた時に、本当に熱い思いを語ってくれて、力が湧いてきます。そういう若者の声に、いつもいつも力をもらいながら、今の中学1年生との日常があります。では、C君いきましょうか。お願いします。

《パネリスト C》

1 自己紹介

(立ち上がり、ゆっくりと)Cと申します。よろしく申し上げます。(着席し)まず、自己紹介から。只今29歳で、14年前に応神中学校を卒業しました。15~16年前にB先生と出会って、そこからずっと今まで、時には、自転車で広島に行ったりとか、ピースサイクルって言うんですか。原爆の式典に行くというのがあったりとか、まあ、いろいろ考えながら、今は、近くの「鳴門メンタルクリニックココロカル」というところのデイケアで、作業療法士をしております。今日はよろしく申し上げます。

お話をいただいてから、何を話そうかなといろいろ考えていたんですけど、今、自分が29歳になって、働き出して8年くらい経つんですが、やっぱり、自分のベースというか、核というか、一番は財産なんですけど、そういうところのお話と、その後、昔の経験のお話をさせて頂けたらなと思います。

2 現場で考えた仕事の上で大事なこと

(ニコニコと)時間をいただいているので自由に使わせていただきますが、いったんフラットに考えていただけたらと思います。僕自身もそうですし、皆さんのお仕事の中で、「仕事ができる定義」ってありますか？ どうですか？(会場を見渡す中で、会場から「効率がいい」と声が返る)効率がいい、なるほどね。そうですね。まあ、いろいろあると思いますし、身近な方をイメージしていただけたら面白いのかなと思います。憧れる先輩だとか、後輩だったり。(返してくれた参加者に)高校生かな？憧れる先輩とか、いい先生って誰だろうとか、ちょっとイメージしてもらったらいいなかなと思うんですけど。

僕自身、大事とは思いますが、「学力」が一番高いところに来たことはあまりないですね。まあ大事ですし、自分のステップアップのためには必ず必要なものだと思うんですけど。

何が大事だろうと考えるきっかけとして、医療現場で実習生とか来るんですね、専門学生とかが。5年位前からその担当職員になったりしていたんですが、いろいろな「パワハラ」とか、「モラハラ」とか言われるご時世になっても、どうしても、多分みんなあるんじゃないでしょうか。「最近の若い子は」みたいな印象だったり、逆に、「あの先輩によろ話さん」とか、「効率が悪すぎだろ」とか、「あの人に何を言ってもアカンけん」とか、そういうものって、結局誰にもあると思うんですね。それは感情のものであって、「出す、出さない」の世界になっているだけだと思うんですけど、それが僕は納得いなくて、何かこちらから発信の仕方を変えたりとか、向こうがどうキャッチしてくれるのかなとか考えていたら、そこまで変わってないんじゃないかなと思ったんです。こっちが。失礼な話、「餌をまく」じゃないですけど、逃げ道を確保したりとか、やり方次第でバンバン来てくれる子っているんですね。そこをこっちの物差しで見た時に、そういう言葉が出てきてしまうのかなと思ったりするんです。

僕自身、幸せなことに慕ってくれる子がいたりとか、手を貸してくれる先輩とかがたくさんいる中で、自分の話で恐縮なんですけど、「よくやっているね」と声をかけていただくことが、人生の中で多いかなと思うんですけど、そういう中で出てくるのが、今日もこうして前でしゃべっていますが、「自分の意見を言っているね」とか、人の話をちゃんと聞いたりとか、「理解力があるね」とか、そういうところを評価をいただける機会が多くて、やっぱり、人の話を聞いて、自分の中に受け入れて、自分の意見を返すって、人権教育に関わらず、それは常に絶対にありますね。卒業したりするとすごくわかると思います。その中で先輩から、「1回言ったことを、お前(分かっているのか)」とか、アルバイトでとかもあるんですけど、そういう状態ってどこでどう経験するのかなと思うんです。

3 全体学習や語り合いの場で培われた心のキャッチボール

定期的にB先生と長電話をしているんですけど、人権教育、いわゆる道徳の授業が5教科に近づいているんじゃないかという議題で、2人でしゃべっていたんですけど、先ほどおっしゃっていた「感想しか言わない」とか「ダメだと思います」みたいなことはすごくわかります。でも、実際、試行錯誤の中で、どうして

いいかわからない先生がそこに頼ることしかできないという視点もすごくわかるんです。経験がないから。そこで吟味して、いろいろ葛藤の中でみんな学んでいくのかなと思うんです。

学生の方もいらっしゃるんですけど、人権教育以外にも、私たち、部活とか友だちとか、恋愛とか、たくさんいろんなことがあるはずですね。我々だって仕事の時に悩みもあるし。私も仕事から市役所の方たちにお世話になることも多いんですけど、「何で、手帳の更新をこんな時期まで置いとくの」と感情が出てしまうことも、もちろんあるんですね。学生に戻りますけど、そういう時に、道徳の教科書で差別はダメだと言ってその子らは救われるのか。そういうことはなく、「じゃあ、自分たちで勝手に解決しろ」それで終わる？(手を振りながら)そんないやらしい話ではないんですけど、そう受け止められても仕方ないのかなあと思いつつ、それって、若い子しんどいだろうなと思いました。

じゃあ、そのキャッチボールがどこで行われていたかというところ、おそらく我々は全体学習だったりとか、こういう場を数、経験させてもらえたからかなと思います。たくさんいろんな題材は中学校の間で先生が用意してプリントして配ってくれたんですが、ごめんなさいね、実際は、正直なところすごく忘れていて多いと思います。けど、それに対してインプットして、置いて、それで自分の意見を言うというのは、確実に残っていますし、絶対的にそれが僕のベースです。そういうキャッチボールがどこで行われているかというのが、A先生もおっしゃっている、言葉が行き交う場なんですよ、きっと。そのプラットホームというか、ベースを誰が作るのかということですが、こういう場だとか、人権作文であったり、意見発表の場、人権集会の場もあるかな？(参加している学生の方を見ながら)あまりないか。まあ、そういうのであったりもしますが、正直ハードルは高いと思います。僕も緊張もしましたし、どうしていいかわからないということもありましたから。

4 これからの子どもたちの基盤と思える本心を語り合えるキャッチボールの場

友だちの中で、そういう話ができたら、自然と畑は耕されますし、(言葉を探しながら)そこが人権教育の必ず必要になってくるベースじゃないのかなと、すごく思います。絶対的に思うことってありますから、学生、大人関係なく。そのキャッチボール、「この人はこんな話をしていた。それを聞いて自分はこう思うよ」というのが、この子たちのこれからの基盤になるんじゃないかと僕はずっと思っています。

この人権作文にもあるんですけど、2021年度の中学3年生がこれを言っているんだと思いました。どういふことかと言ったら、やっぱり、「私がどんな人なのか近所の人に聞いてきた」みたいなことを言っていたりとか、この子自身が、「その人たちを悪として見てはいけません」とか、「心がモヤモヤしています」とか言っているわけです。

そうですね、あれもB先生と話していたと思うんですが、さっき、「寝た子を起こすな」という話がありましたが、その考え方ではないんですけど。人権学習の中で部落問題を取り上げなかったとする。Aという学校は地区があるから熱心にやってきた。隣のBという学校は地区がなかったから学習をしてこなかった。一緒に高校に行って、A中学校の子がB中学校の子と出会った時に、B中学校の子から部落の言葉が出てくると。

5 部落問題 ファーストコンタクトは家族

だいたいそうじゃないかと思うんですが、ファーストコンタクトは家族じゃないかなと思うんです。部落の話で、お母さんとであったりとかおばあちゃんであったりとか。その中で知らないわけないと思うんです。勉強しなかったら、「部落って何ですか」の世界になるということでしょう。そんなわけないだろうと思うんですね。じゃあ、秘密にして、子どもにうやむやにするんですかということですよ。

例えば、熱い思いのお母さんがいて「子どもに教えない」。でも、子どもには、絶対にばれます。そんな

気まずいこと。それでも頑張って「こんなことはないから」とうやむやにして、子どもが知った時にも介入できない。それはちょっとつじつまが合っているのかなあとすごく思います。

少し、昔の話をしようと思うんですが、当時、中学校だった時、体育館に集まって全体学習をしていました。ある友だちが、男3人兄弟で、家族で外食をしていました。僕の友だちは3男で、お兄ちゃんが彼女の話になって、結婚を考えているという話をしている。それを聞くとともに聞いていただけらしいんですが、お父さんお母さんが開口一番、「どこの子？」って。「どこそこの地区の子」「ああ、その子だったら同じ立場なので問題ないなあ」と、外(外食中)でしたから、そういう濁し方をした。

当時、僕たちは、一生懸命勉強している最中で、僕の友だちは同和地区のことを聞いてしまった。すると、お父さんが急に顔色を変えて「こんなことでしゃべるな」と言う。多感な時期ですから、友だちはモヤモヤを抱えたまま、全体学習でそのことを言ってくれたんですね。

そういう話があって、当時、僕は、おじいちゃんが2課の巡査部長をしていて、暴力団一筋で、まっすぐな感じだったんですけど、僕もいっぱい勉強していく中で、えん罪の狭山事件であったりとか、いろんな題材を学んで、警察の意見はどうなんだと思っておじいちゃんに聞いたのをきっかけに、おじいちゃんによくバトルをするようになって。でも、僕も言うだけ言うけど、なんか、クシュンとなって、ちょっと拗ねて自転車でちょっと遠くまで行くけど、日が暮れたら帰るといような中学校生活を送っていたんですけど、常にそういうモヤモヤがあったんです。

僕もギリギリ学習会がある時期で、途中から「中学生友の会」と名前が変わって、僕は行きたくて仕方がなかったけど、「行くな」と言われていましたから。だから、小学校くらいの時から、家族が差別の中でもまれているような人生だったんじゃないかなと思います。でも、僕は知らなかったから、「お祭りとかあるから行きたいなあ。お菓子出るん？いいなあ」本当にそんな感じでした。でも、中学生友の会になって、自分も勉強するようになってきた。その中で、自分の中でつじつまが合わなくなってきた。じいちゃんとバトルするというのを繰り返して。今は、じいちゃんは亡くなってしまったんですけど。中学生友の会では、受験勉強して、後で人権学習をして、解散みたいな会に僕も混ぜてもらって。秋冬は、ほぼ毎日のように行きましたね。

話は戻りますが、友だちのお兄ちゃんのそういう話を聞いた時に、もう耐えられなくなって、1番に言葉を返したんです。滅茶苦茶モヤモヤするよなって。これは隠しているつもりなのかなと思うんですね。そこは絶対いろんな思いがあったはずじゃないですか。お父さんもお母さんも。それが言葉に上手く伝えられない。子どもを思う気持ちはネガティブなものじゃないと思うんです。ただ、そこがキャッチボールできない。お前わかっつけよ、と無言で言う。終わり。それでいいのかなって本当に思います。

6 今思う 発信する 受け止める 考えることの必要性

29歳になって、僕はまだ結婚はしていませんけど、子どもができている友だちもたくさんいますし。はっきり言って部落差別の問題だけじゃないと思います。いじめなんかもそうですし、離婚、僕も親が離婚していた時に、今思うと、お父さんお母さんとうまくキャッチボールができなかったなと思います。

友だちが嫁さんの家族とうまくいかないとか、子どもがすごいやんちゃで困っているお母さんがいたりとか、子どもがいるけど旦那とうまくいかないとか、そういうことだらけと思うんですよ。その中で、キャッチボールをする基盤というのが、今、もう一回振り返った時に、やっぱりどこにあるのかというと、僕は、中高校の全体学習、あるいは人権学習、そういうところにあるんじゃないかと思っています。

部落差別だけじゃないはずなんですけど、部落差別に返ってくる面白さが、『水平社宣言』の言葉ですね。「人の世に熱あれ、人間に光あれ」でしたっけ。全部の文章は覚えてないんですけど、印象として芯が残っているというか。もっとフラットでいいと思うんですよ。どの問題でも、自分でキャッチして、考えて、話

をするのが、どれだけ大切か。家族の中で、中学生とか初めて気づくことっていっぱいある中で、「部落差別なんて、そんなものはないけんあまり言われん。」と言われ、ずっとモヤモヤしたまま。その子らが大人になって、右も左もわからなくなるというよりも、やはり、どんな情報でも発信する、受け止める、考えるというのが、必ず必要になってくるんじゃないかと思います。それは社会に出ても実感しますし、それがすべてだと思います。(笑顔でコーディネーターを見ながら)以上になります。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございました。10数年前のことが昨日のここのようによみがえってくる。そういう学びが残ってほしいなと思います。この夏、延期になった関係で高校生の参加はなかなかできませんけど、1学期に何人かの生徒から連絡が来るんですね。「先生、鳴門のフォーラムの日は決まりましたか？」と。同窓会のようにここに集まってくる高校生がいるということに感動するんです。人権学習が喜びになってくるんです。

実は、今高校1年の生徒たちは、4月、5月がコロナで休校だったものですから、中学3年のスタートが5月の終わりだったんですね。マスクをつけての生活ですけど、なんとか中学3年を誇らしい喜びになってほしいということで、マイクを握って、人権学習を積み上げていったんですね。

すべての子が10回以上語っています。1回の授業で2回語る生徒も当然いますから。それがずっと映像に残っていくんですね。それをパワーポイントに編集して、生徒たちに届けるんですけど、夏休みに取りに来たり、2学期になって取りに来たりして、その生徒たちにはUSBにデータを入れるんですけど、その時にお母さんがやって来て言うんですね。

「高校が別になった友だちと鳴門のフォーラムに行く約束をしていたんです。延期になって本当に残念です。」

その生徒たちは徳島市内の高校に行っていますから、鳴門まで来てもらうのは夏休みでないと無理ですね。そういうふうに入権教育を通して深い絆ができていく。このフォーラムもそうなんですけど、毎年県外からたくさんの方がおいでるんですね。そこで1年に1回マイクを握ることが喜びになっていく。

それは徳島県内だけでなく、そこで自分を語る、自分をみつめるということが喜びになっていく。語ることが喜びになっていく。絆ができるということが喜びになっていく。そういう関係性が広がっていく学びです。それによって私の人生は変わりました。今まで恥ずかしいと思ったことが、逆に誇りになっていくんです。部落に生まれたということが、部落差別をなくすということが誇りになっていく。父親の仕事がずっと恥ずかしがっていた自分が、まったくそうでない自分になっていく。思いをつかんでいく。関係が変わっていく。人と人とのつながりが変わっていく。そんな喜びです。

それは、そういう関係を一緒につくってくれた仲間がいるということです。子どもたちもそうです。仲間と一緒に来るから楽しいんです。そのことを語り合える仲間がいるということです。一緒に全体学習をつくっていったB先生に、この後話をさせていただくんですけど、家族ぐるみでという営みを積み上げてきた仲間です。どこの学校へ行ってもそういう関係を広げていく。私自身もそういう教師であり続けたいと思います。では、B先生、いきましょうか。よろしくをお願いします。

《パネリスト B》

1 シャべらないと思っていた中学生の本気でしゃべる姿に出会ったところからの始まり

Bです。よろしくをお願いします。T-over人権教育研究所を立ち上げて2年になります。一昨年の11月頃、ちょうど今くらいの時期ですね。思い立ったように作ろうと思いました。それまで、ぼんやりと思っていた部分もあって、どこかで踏ん切りをつけようと思って、立ち上げようと思って立ち上げたわけなんですけど

も、それから2年になります。

私が、なぜそういうふうにしたかという、板野中学校に赴任したのが1991年でした。だから、今から30年前になります。1991年に板野中学校に赴任した当時は、今のC君の話をいただきますけども、中学生はしゃべらないと思ってたんですよ。高校生もそう思っていた。自由にしゃべらないと。ものを言わないと。今日うちの学校は人権学習の参観授業だったんですけど、午前中から午後にかけてね。学年、クラス別に分けて、分散しながら参観授業してます。午前中授業見てきました。多くの先生がやっぱりそんなふうになっています。しゃべらないと。中学生はしゃべれないと。

30年前は私もそう思っていました。中学生はしゃべらないものだ。だけど、全体学習というみんなで語り合う人権学習を当時の板野中学校が始めて、それを見た時に、「あ、違う」と思ったわけです。しゃべれるんだ。話して、聞いて、また話して、聞いてという、そのやり取りができるんだということに、その時に気づけたんです。

それはそうですね。当たり前と言えは当たり前なんです。知り合いや友達と会話ができるのであればですよ、聞いて返して聞いて返してということをして日常的にしているわけですから、しゃべれたっておかしくはないですね。後は本人がしゃべるかどうかだけの問題であって。だけど、当時の板野中学校でそういうのを目の当たりにして、「ああ、できるんだ。これは、まあ当たり前のことだな」と信じてしまうと、そうだと思ってしまうと、子どもらはしゃべれてしまうんですね。つまり教師側が、しゃべらないと勝手に決めつけているものだから、子どもたちはしゃべらない。その時間をどう過ごすのかということに終始する。だから、教師の意識を変えるところから始めないといけないのかなと思います。

今、C君がほとんどのことを忘れてしまったということを書いていましたが、忘れるんですよ。忘れるんだと思います。我々だってそうでしょう。学生時代に勉強してきたことを、今、どれだけ頭に残っているか。学生さんは、残っていますよね。(会場から笑顔でうなずく姿を見ながら)良かった。年とともに、1+1はまあ、かろうじてわかりますよ。私は数学の教員ですけど、たいていの社会科とか理科で習ったことは忘れていきますよ。そんなものでしょう。どうですか。それは、そうでない方もいらっしゃると思いますけれど、私はそうです。

2 人権学習 忘れたことをそぎ落とし何が残るか

人権学習で学んできたことだって、たいていのことは忘れると思うんです。けど最後にそぎ落としてそぎ落として、これ忘れちゃった。あれ忘れちゃった。1871年、太政官布告解放令、忘れちゃった。1922年、水平社宣言、岡崎公会堂忘れちゃった。あれ忘れちゃった、これ忘れちゃったとそぎ落としていって、最終的に何が残るかと言ったら、「何かよくわからないけど、人権学習面白かったな」というプラスイメージ。それが残るかどうかなのかな感じがするんです、私は。それが今の自分にどう生きているのか、そこが大事な感じがするんです。

だけど、先に言っていた、私の30年前のように、中学生はしゃべらないものと思って、教師が今の私のように一方的にしゃべってしまう。歴史とか国語の時間のように資料を扱って終わってしまう。そうなってしまうと、その時間は堅苦しい時間。面白くない時間。辛い時間。じっと我慢の時間。やっぱりそれは後になって何が残るかと言えば、「人権学習面白くない」「退屈な時間だった」「もう2度と受けたくない」、そんなふうになってしまうのかなという感じがするんですね。

その中で、将来仮に、その教室の中から教員志望の子が出て来た時に、そのまま高校へ行き、大学へ行き、教員になりますとなった時に、その子がいったいどんな人権学習を現場でするのかとなったら、やっぱり「人権学習、できたらやりたくない」となってしまうのかなという感じがするんです。「できることなら、もう、したくないなあ、どうしたらいいのかなあ、よく分からないけど…」となってしまうのかなという感じがするんです。だから、われわれが今、現場で子どもたちにどんな人権学習を提供するのかだと思うんです。

3 30年前によく聞いたフレーズを今振り返って

(笑顔の中で生き生きと)最近よく思うことの中に、ちょうど30年くらい前によく聞いたフレーズの言葉の中で、どんな言葉かというと、「この教育以上に大事な教育はどこにあるんだ！」この言葉をよく聞いたんです。誰とは言いませんが、その言葉を聞きながら「いや、数学も大事だけどなあ。他にも大事な教育はあるんじゃないかな」と内心は思っていたんです。声に出して言えません。怖いからです。(会場やパネリストから笑いがこぼれる)けど、内心はそう思ったんです。

でも、この年になって思うのは、全く同じことと思いますね。言い過ぎかもしれませんが。当時の私が思うように。けど、「人権教育以上に大事な教育は何があるんだろうな」と今は思います。「いや、B、それは言い過ぎやで」と言われるかもしれませんが、でも、そう思います。あの時、その言葉を投げかけてくれた人の気持ちが、ちょっとだけわかるような気がしてきたなあという気がするんです。

というのが、例えば、このパンフレットの裏面に、見ていただいて下の部分、2段落目のところなんですけど、ちょっと読んでみますね。「PTAの会合で、所属する専門部をどこにするかを定める場面」、よくありますよね。子どもがいる学校のPTAの専門部、「人権部が人気」だと聞いたんですよ。喜んだんですね。その子は、同和教育、人権教育を熱心に取り組んできた元教え子です。内心喜ぶんです。「あ、進んで来たな、同和教育、人権教育も。世の中は変わってきた！」滅茶苦茶喜んだんです。次の瞬間、奈落の底に突き落とされる。「することが少なくて楽だから」やっぱりショックですよ、それは。

考えてみたら、もしかしたらうちの学校にあるかもしれんと思うんです。そう思いませんか？思わないかもしれませんが、言われてみたらそうかなという節も感じないわけではありません。「楽だから」そんな基準で選ぶのか。この大人の人権に対する意識の表れの一つともいえると思うんです。

4 中学で行われる高校進学説明会で気になること

それから、もしかしたら耳の痛い方がおいででしたら、ごめんなさい。高校の進学説明会。わかりますか。中学校で、高校の先生とか管理職、校長先生とかを招いて、お話をさせていただく。(高校生に向かって、声を潜め)ここに鳴門高校の先生来ているかな。(高校生の反応を見ながら、笑顔で)あ、来てない。良かった。鳴門高校は関係なく大丈夫なんですけど、どことは言いませんけど、いろんな高校の先生に来てもらって、「うちの高校はこんなんです」「こんな教育をしています」「こんな大学に行っています」「医学部に何人入っています」「部活動はこんな実績があります」みたいな話をしてもらいながら、高校のアピールをしてもらおうです。それで中学生に進路選択の判断材料にしようという取組です。

多くの中学校がやっているんじゃないかなと思います。うちでもやりました。高校の先生方の話を聞いていて、途中から気になったことがあったんです。それは何かというと、実績は言ってくれるんですよ。まあ、それはいいです。アピールすることにつながりますから。

その気になったことは何かというと、「人権」というワードは一言も出て来ないんです。これが10年前20年前だと、出てきていたような気がするんですよ。「うちではどんな人権教育に取り組んでいます」とか、「生徒一人一人の人権意識を高めるために」とか。そういう文言が出てきていたような気がするんです。だけど、10校来てもらって、10校とも、一言も「人権」という言葉が出て来なかったんです。

いつか高校の先生にあったらお話ししようと思ったんです。いや、人権教育は取り組まれていると思うんです。していないわけではないと思うんです。ただ「人権」というワードをどこかに出してほしかったんです。

「こんなことに取り組んでますよ」「どこそこの大学に行っています」「国公立大学何人」、「医学部に何人」、「部活動の実績はこんなもの」だけど、その根っここの大事なところに、しっかりと人権教育を据えて、「どここの大学に行っても、どこに就職しても、豊かな人権感覚を持ってそこで頑張りますよ。頑張らせませよ」と

いう一言があったら、「ああ、ステキな学校だなあ」と思えたかもしれないんです。だけど、その部分が聞けなかったのが残念だったんです。

5 人権教育抜きの取組になっていないかという危機感

それで、何が言いたいかと言ったら、どこかに「人権」というワードが置き去りにされているような気がするんです。その危機感があるんです。「同和教育」が「人権教育」に変わりました。その時にもさんざん言われました。「ブ抜き」「サ抜き」部落抜き、差別抜きという取組になっていって、果たしてこれでいいのかということが20年くらい前に盛んに言われました。

今、この時代になって思うのは、「ジ抜き」になっていないかな、人権教育抜きの学校現場の取組になっていってしまっていないかなという危機感があって、2年前にT-over人権教育研究所を立ち上げたんです。

いいのかどうか分かりません。何がいいのかわかりません。ただ、私の中には、子どもたちが、小学生であろうが、中学生であろうが、高校生であろうか、自分の思っていることを素直にありのままにきちっと表現ができて、聞いたこともちゃんと返して、また、聞いて返して聞いて返してというやりとりの中で、自然と人権意識や人権感覚が高まって育っていくんじゃないかなということを経験してもらいましたから、そんなことを進めていきたいなと思います。そういう中で、T-over、「たがいに越え」るような教育を、「ともに越え」ていけるような教育を広げられたらなと思います。「Talk over」というのは、「じっくり話し合う」という意味ですが、そういう思いを込めて作った次第です。

いろんな所で、その意味が伝わっていけばいいかなと思います。とりあえず、こんなところでよろしいですか。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございました。やっぱり、小学生も中学生も高校生も求めています。人を大事にするということを、人に大事にされるということ。大人になってもそうですよ。わが子から大事にされる。わが子を大事にできる。職場の仲間を大事にできる。職場の仲間から大事にされる。近所の人から大事にされる。そういう信頼と尊敬の絆の中で、私たちは生きているんだと思います。

子どもたちに毎年すごく響く資料があるんですね。亡くなられて、もう30数年が経つんですけど、佐藤文彦という先生の唯一の講演記録なんです。肉声も残っています。この中に「自分以下を求める心」という資料が出てくるんです。この資料は徳島県版の人権読本の「わたしの願い」に載っています。

実は、私は文部省(当時の名称)で中学生の道徳の読み物資料を書く場面があったんです。その時に、私は佐藤先生からこの資料をいただいていたので、文部省の会議に、この資料を出したんです。この資料を文部省の読み物資料の中で掲載しようと考えたんですが、その時に出典がわからなかったんです。後に、広島県尾道市の中学校に勤務していた八ツ塚実という先生の生徒が書いた生活ノートであるということがわかったんです。

この資料を文部省が取り上げることはなかったんですけど、まさに、私たちは自分以下を求めて生きています。誰よりも、下を求めています。優越意識に支えられています。そういったことが、事ある毎にあるんですね。この講演記録の中に、「同和問題は生命なんだ」という佐藤先生の言葉が出てきます。佐藤先生の言葉を聴いていただきます。

ある日、教え子がやってきた。そして、「先生、僕はどんな中学生でしたか?」「君はいい子だったよ。」そう答えると、「ああ、そうですか。」と返し、力なくその教え子が帰っていった。数日経ってその教え子は命を絶った。結婚をして、結婚後に部落であるということを知り、絶望し、苦しみ苦しみを絶った。そ

の時に「しまった！」と思った。もし、彼の中学時代に同和教育をしていたら、部落問題を語り合っていたら、私は彼に聞いただろう。部落問題の話をしただろう。同和教育をしてなかった。だから、そういうことも問うこともしなかった。彼はそのことを言う関係がなかった。そのことが悔しい。同和問題は生命なんだ。

こういう言葉です。この「同和問題は生命なんだ」という言葉は、中学生の言葉がしみ込んでいきます。中学1年の生徒が、この言葉を切々と語るんです。同和問題を自分の問題として学んでいきたいということ語るんです。

先日の、松茂中学校の1年生の授業研究会。実は、今年、板野郡の人権教育研究大会が昨年が続いて中止になりました。松茂中学校は、板野郡の人権教育研究大会の会場校だったんです。研究授業の公開授業ができなくなったということで、校内全部のクラスを自習にして、校内の研究授業をしました。1年生の1つのクラスの授業を校内全ての教師が見るわけです。そこで、子どもたちが生き生きと語っていったんです。

その授業研究会で私は、同和問題を生涯にわたって語り合える信頼と尊敬の絆をつくる人権教育について語りました。その訴えを受け止めるように、3年生の先生が研究授業に取り組んでくれました。

その研究授業を実施したクラスは、中学生集会で活躍した生徒もいるクラスで、昨年度、私が「スダチの苗木」の授業をした時に、心の中にある思いをどんどん返してきた子どもたちもいて、本当に楽しみにしていたんですけど、まさに、「わがこと」を語り合う人権学習が生徒一人一人の生きる糧になっていく、そんな授業になったんです。

この授業をしたのは、35歳の教師です。彼は、5年前の自分の結婚のことを語り出しました。授業のテーマは、「幸せな結婚」です。まさしく「わがこと」をさらけ出す授業です。その授業の導入に、心が驚づかみになります。

今年度、中学生集会で実行委員長を務めた生徒、人権作文を読んだ生徒が、それぞれの相手と、役割演技で、部落出身の青年と、部落でない青年の役を演じ、結婚に反対する父親を説得していきます。その父親は結婚に猛反対しているという設定です。その猛反対している父親を授業者である教師が演じていきます。その父親役の教師を結婚を決意した2人は必死に説得していくというロールプレイでした。

父親役の教師は口汚く結婚を反対します。この父親役を必死に2人の生徒が説得するやり取りです。これがすごかったんです。よく語るわと思いつながり見ていました。その父親役の教師が必死にやり取りします。もう、吸い込まれて行きました。その役割演技に取り組んだ生徒たちの誠実な語りに応えるように、この教師は、自分の体験を語り出しました。

その教師は、「徳島であった5年前の話」という形で切り出しました。彼の言葉です。

「結婚の約束をした彼女が、私に心配そうに、申し訳なさそうに言いました。

『ちょっと、心配なことがある。両親があなたの家が被差別部落かどうか調べている。どうも同和地区ではないかと言いつ出した。』

この彼の言葉にドキドキしました。何が始まるんだろうかと思い、「ええっ！」と思いました。彼はこう続けました。

「その言葉を聞いた時、頭の中の後ろの方が重くなって、ガーンと、何か堅いもので殴られたような感じになりました。やっぱり来たかと思いました。私はドキドキしながら彼女に聞きました。

『君はどう思っているの？』

彼女はすかさず言葉を返してきました。

『私は結婚する。』

その言葉を聞いた瞬間、私の頭の後ろの重たいものがスッと取れて行きました。」

彼は、この後に自分の披露宴の写真をテレビ画面の中に大きく映し出しました。幸せな結婚式の披露宴です。これは、彼から、今日話をするからということでもらった写真です。本当に感動しました。(シャンデリアの光り輝く会場に、2人でしっかり寄り添いながら入場する姿が会場前の画面いっぱい映し出される)

彼はその後、生徒にこう問いました。

「幸せな結婚をするために必要なものは何か？」

親が反対するとか、そういうことではなく、一人一人なんです。ここにいる一人一人なんです。自分はどうかということです。

出会った教え子たちが、結婚するという年齢になって、付き合いが始まる。交際相手から問われる。

「あなたは、〇〇中学校の出身だけど、絶対部落でないでしょう？」

こう問われた時に、「違う」と言いたい。でも、騙し続けることはできないし、嘘はずっとは通らなくなるから、必死に答える。

「そうだよ」と…。

その言葉にショックを受け、すっと気持ちが冷めていく。そして、彼(彼女)は、離れていく。そんな経験をした教え子たちがどれだけいますか。結婚差別にすらならない。

一人一人の問題です。親を説得するのは違うんです。ここにいる一人一人がどう生きるか、どういう幸せな家庭をつくっていくか。自分のことなんだという問いかけを彼はクラスの子どもたちに迫っていったんです。この教師の語りに応えるように、全員の生徒が「偏見・差別への怒り」を込めて、自分に何が必要かを綴り、自分の思いを語っていきました。

小さなホワイトボードに決意を込めた文章です。書くと、ホワイトボードを一枚一枚担任が預かり、張り出し、時間の関係でそんなに長くは語れませんが、全員が語ってこの授業は終わりました。

久しぶりに、松茂中学校でこんなに感動する授業があるのかと思いました。本当に、板野中学校での全体学習がよみがえってきました。

本物の教師を見たという気持ちです。教師の本気の姿に出会う度、やっぱり力をもらいます。生き生きと自分の思いを伝えあう生徒の姿、すがすがしい感動が広がった授業でした。

Dちゃんの言葉、C君の言葉、そして、B先生が言いにくいことを、露骨に生き生きと語ってくれました。そういう思いに触れて、やっぱり思いを共有する。しゃべりたくて居られず、ごそごそされている方もおられます。そういう思いを共有できたらと思います。

今日、こうして集まっていたことに感謝します。限られた時間ですけど、感想なり思いなどを語っていただけたら嬉しいなと思います。いかがでしょうか。

最初に、龍昇学園のK先生を紹介したいと思います。私は、龍昇学園に生徒たちを、北島中学校時代も、藍住中学校時代も、そして、松茂中学校でも送ってきたんですけど、なかなか学校に通えなかった子どもたちが、イキイキと龍昇学園で学び、大学や専門学校へ進学したり、希望の職業に就職していく姿を目の当たりにしてきました。

そして、龍昇学園で学んだことを誇りとして、その思いを語ってくれる教え子がいます。特に、語り合いの人権学習に取り組んだ生徒が、龍昇学園でも実施されている生活ノートを誇らしげに語ってくれます。

今年度も担任した松茂中学校の生徒たちが、龍昇学園に期待と誇りをもって入学しました。そして、龍昇学園でさまざまな資格にチャレンジする喜びの日々を送っています。その生徒たちが再会するたびに、龍昇学園で学んでいる喜びと龍昇学園の先生方の優しさ、自分が大切にされている感謝を伝えてくれます。

この会場に、念願叶って、私が出会ってきた生徒たちをイキイキとよみがえらせてくれた先生がおいでで

いただいています。K先生、是非語っていただけませんか。

《フロア K》

突然の指名でびっくりしていますが、龍昇学園のKと申します。本日のフォーラムに参加したことで、私自身も、学生時代、人権教育というのを受けてきたのですが、本質というのは、もしかしたら、わからないまま今まで生きてきていたような、そんなすごい、今までの自分は何だったんだろうかというようなくらい、皆さんの熱い思いを感じました。

「寝た子を起こすな」それから「耳の痛い話」。本当に本校でもみんながもっと深いところから勉強していくべきだなと痛感いたしました。一番印象に残っているのは、「人権教育って楽しかった」というところ です。

まだまだ若輩者で、人権教育については、勉強不足のところがあるのですが、私事で、今年度からある組織の差別解消、それから格差を是正する委員会に入りました。ちょうど、先日その委員会にて、全国のメンバーと共に立ち上がって、問題提起をしていこうという話がありまして、本日、自分のことにも置き換えて、ものすごく勇気をいただきました。本当にありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございました。(発言者に笑顔で)先生、ここでマイクを握って語った瞬間に、もう完全に仲間になりましたので、毎年ずっと語ってください。(会場の後ろに誘いかけるように)Y先生、お孫さんのことをお話しただけならと思います。

《フロア Y》

孫が、まさか私の歌を人権の作文に書くとは思わなかったんですけど、作ってよかったなという感じがしております。ちょうど31年前の今日あたりは、12月8日が発表でしたので、それに向けて練習したのを思い出します。

今は、もう退職しまして大分になりますので、ボケもちょっと来ているような感じもするんですけど、今日はですね、本当に目が覚めたといいますか、やっぱり家庭で、人を愛するというか、人権意識を高めるといふか、根幹はやっぱり、人が人間が好きになるということだと思ふんです。そこからすべてが始まる。やっぱり人間がつくった差別ですので、それは必ず人が、人間が、我々が、少しでもなくしていけるという自信というものを持たなくてはいけないと思います。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございました。今、中学生集会の、大麻中学校3年生の意見発表映像を見ていただいてもグッとくるんですけど、実際にその舞台での生の声を私は聞いていますので、その時に、こんな幸せな家族があるんだと思ったんです。

その意見発表の時には、Y先生が作ったということがわからなかったものですから、発表した彼に「どんなおじいちゃんだったの？」と聞いたんです。そのおじいちゃんはどんな話を孫さんにされているんだろうかという、夢のようなことを感じました。

おじいちゃんのことをイキイキと話してくれて、そのつながりが本当にうれしかったし、お会いして、この「二十五小節のふるさと」のデータをお借りできたことは、本当に大きな喜びでした。中学生集会の時は夏休みでした。あれからお会いしていませんが、よろしくお伝えください。それでは、鳴門高校の皆さん、是非思いを語ってください。

《フロア 鳴門高校 生徒》

(高校生が相談しながら、1人の生徒が立ち上がりマイクを握る)今日の話聞いて、学校でする道徳の時間が、自分の発表するのが感想だけになっているということがよくあるので、今話を聞いて、自分の道徳に対する姿勢を考え直すことができるなと思いました。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとう。それじゃあ、中学生集会の仲間、Fさん、最後をお願いします。Fさんも、鳴門高校の出身です。(鳴門高校の生徒に向かって)皆さんの先輩です。

《フロア F》

(照れくさそうに、鳴門高校生の方を向きあいさつをして)この人権地域フォーラムには、毎年来させてもらっていて、話を聞きながら、前にいる人すごいな、話が濃いなと思いながら聞いたりとかしています。

学生時代いろいろ活動していて、Cさんも言っていたように学生時代にやっていたことって、全然残ってなかったりとかするって、私もすごくわかるんです。でも、なんか、その時に語った仲間とかってずっとつながっていて、高校もつながっていて、久々に集まって話をしたりとか、こういうのを聞いて、みんなどう思うというみたいな話をよくしたりするんですけど、その中で、こういう活動をしていて出会った仲間って強いなって思います。

本当にしんどい時に、誰かが泣きながら、「こんなにしんどかった」と話をした時に、それを支えてくれる仲間がいる。そういうことを肌で感じたことが何回もあって。私も、学生時代に勉強したことがあまり残っていないということは感じている部分があります。中学生集会にも毎年行っているんですけど、毎年、爪痕を残したいと思って。語ったことを全部覚えていなくても、そういえばこんなことを言っていた人がいたなと、誰だったかは覚えていないけど、このフレーズは残っているんだなというものを少しでも残していきたいと思っています。

毎年、ここだけ覚えて帰ってほしいというものを語っているんですけど、こうして今年も延期にはなったけど、開催できてよかったな、来れてよかったなと思っています。いつだったかは忘れましたが、たまたまA先生と会う機会があって、その時に案内のチラシをもらって、今回ギリギリまで忘れていて、来れるかどうかかわからなかったんですけど、今日来てよかったです。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

この後、最後に3人に語ってもらって終わるんですけど、皆さん、やっぱり人権学習の喜びというのは、こんなことは絶対にしゃべらないと思ったことが、誇りと喜びをもってさらけ出せることです。それが、フォーラムであったり、中学生集会であったり、いろんな人権の学びの場になっていくんです。

言いたくないことは絶対に言わなくていいんです。でも、言いたくなるんです。それに返してくれる仲間がいるということです。ずっと自分の中に秘めて隠していたことが安心して誇りをもって語れる。それを受け止めてくれる。返してくれる。信頼できる仲間がいっぱいできるということです。結局仲間です。本当のことを聞いてくれる、言ってくれる仲間がいたら、やっぱり踏ん張れます。力が湧きます。

今紹介した授業もそうです。仲間の教師がいるし、仲間の子どもたちがいるから、まさに、誇りと喜びをもって、35年間、絶対にいうことがないと思ったことが堂々と言えるし、生き生きしているんです。人生が変わっていくんです。それがこの教育の喜びだし、そうなった時に、私たちの人生というのは、本当に誇らしいものになっていくと思います。それでは、Dちゃん、どうぞ。

《パネリスト D》

先程の話に言えなかったことなんですけど、私は4人きょうだいなんですけど、全員結婚差別を受けてきました。3番目の姉だけ結婚できなかったんですけど、私は結婚する前に別れたので何もなかったんですけど、そういう結婚差別を受けてきて、誰に相談したかという、先生方やその中学生集会でできた友だちでした。中学生集会でできた友だちは、本当に他の友だちと違って、本当に深い仲になれていると思います。中学1年生から友だちになって、その子とは今もママ友になっております。

中学校の時も、1回講演をさせてもらった時に、「こんないい子たちなのに差別するなんて本当に許せん」と言ってくれた先生がいらっしゃいました。本当に、人権を通して仲良くなった先生方や友だちっていうのは、一生ものだと思っています。なので、先生方も、もうちょっと寄り添ってあげてほしいなと思います。自分が担当しているクラスには、被差別部落の子がいるかもしれないし、それを聞いてあげられるのは自分しかいないという気持ちで、本当に人権問題に取り組んでいただきたいと思っています。

そんなに深い話はできませんでしたが、今回は、本当にありがとうございました。(拍手)

《パネリスト C》

ここでは中学生ということがピックアップされていましたが、いろんなことを常々考えているのではないかなということはずっと思います。それは僕が携わっている専門学校生もそうです。家族の方でそんな話が出たの言えず、僕も多感な中学生だったので、男連中が、ちょっとピリッとしてたら俺のこと指してたかなとか、そういうこまごましたこともあるし。そういうことが言えない場というのは、もしかしたら、環境として僕らが作ってしまっているんじゃないかな、ということ常々思っています。

僕の場合、職場で学生の思いを聞けないっていうところなんですけど、学校だったら先生方とかたくさんいろんな努力されて忙しいでしょうけど、一番大事なものは人権教育ではないかという話は、人間として何をもって、何をわかって欲しくてというのは絶対的前提です。人権ですよ。それが大事なのかなと思います。

これは一つ違う持論なのかもしれないんですけど、仲間とかはすごく強いものだと思うんですけど、リアルで、僕自身の経験だと、案外連絡を取らなくなってしまった子もたくさんいるし、ほぼそうなんです。皆さんも中学・高校の友だちはどうでしょうか。今も続いていらっしゃいますかね。いる人は羨ましいなと思うんです。

けど、結局話し合う場、意見を交換する場を経た人間は、私を含めてですけど、隣のDさんとは今回初めてましてなんですが、何か近いものがあったりとか、学生さんが大学に行って就職した場合とかに、仲間がいない時に思いを発信したりとか、自分で自分の人生と言えど大袈裟ですが、生き方というのを獲得していく絶対的な畑は、こういう全体学習などで作られているのではないかなと思います。

一番最初に言ったんですけど、そういう意味で意見交換をしてきた、人権教育を受けてきた身としては、一番大事な財産が僕の芯になって、今でもずっと生きているんじゃないかなと思います。今日は本当にありがとうございました。(拍手)

《パネリスト B》

(言葉を探しながら)僕が心配を勝手にしているのは、今、学習会がなくなって、当時学習会でされていた立場の学習が、それぞれの家庭に任されて、できている家庭もあればされていない家庭もあって、結果として自分の立場を知らずに大人になっている世代がどんどん増えているということ、勝手に心配しています。

中学時代に部落問題の学習を徹底的にやってきた教え子と、今、この4月から一緒に仕事をしています。彼は、成人式の日に夜飲み会で、「先生、部落差別などは全然聞きません。少なくとも自分の周りには感じ

られない。もう、部落差別などはないのと違う？」と、私の隣で一緒に酒を飲みながら言っていた彼と、今一緒に仕事をしています。

4月に赴任してきた時に、彼女がいるかと聞くと、「はい、います。結婚しようと思います。」と言いました。ちゃんと自分の立場を話をしているのか尋ねると、「しています。理解のあるご両親で、もうそんなことを言う時代ではないと言ってきて、結婚できそうです」と言っていました。

ですが、その彼のお姉さんは、厳しい結婚差別に今あっている最中だと、聞いていて痛々しいくらいでした。「成人式の日にもう部落差別はないとか言っていたけど、あるやんな」という話をすると、彼は「はい」と言いました。お姉ちゃんが相談できる人はいるのかと聞くと、家族の中では話をしていますと言って、それは良かったと思いました。

相談できる人がいないとしんどくなります。これは部落差別だけの話ではないと思います。やっぱり、自分の胸の内にあることを相談できる仲間とか、人とか、家族がいれば、気持ちも和らぐんでしょうが、それが、相談できる人がいないとなったら、やっぱり心配に思います。今まで出会ってきた地区の子どもたち、部落の子どもたちと徹底的にこの学習をしてきたわけですけども、いつでも、会ったらその話ができることで、もちろん何もなければいいんですが、何かあった時に、今も相談にはのっているわけですが、声をかけてきてくれる一人であつたらいいなあと、そういう相談がなければいいんですけど、そんな一人であつたらいいなと思います。

基本的に、話して理解できない人には話しません。相談しません。理解が望めそうな人にしか相談はできません。理解はしてもらえないなあとと思う人には相談しません。言わないから部落差別がないことになっている。あるいはなりつつある、そんな気がします。そこを危惧します。踏ん張って、T-overとして発信し続けていきたいなと思っています。以上です。ありがとうございます。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございます。アツという間の2時間でした。安心して、誇りをもって、喜びをもって自分が語れる。自分をさらけ出せる。そんな教室、そんな学年、そんな学校。そういう営みを大事にしていきたいと思います。小学校、中学校、高校、大学も一緒です。本心が語れたら、その空間が喜びの場になります。安心の場になります。そういうつながりをつくっていくんです。

年に1回のフォーラムです。夏休みに、本当に厳しい中で延期ということで、粘り強く今日をつくっていただいたことに感謝します。この会場になったことで、スクリーンも大きく、映像を見て頂けたことが本当にうれしかったです。来年も是非ここを活用させていただければと思います。

そういう意味で、本当にたくさんの仲間がまた集い、マイクを握る喜び、本当の話が聞ける喜び、本当のことがいえる喜び。そういう場として、人権学習の場が誇りと喜びをもって、深い深い絆をつくっていく。互いの人間性を本当に磨いていく。ああ、自分でよかった、この私を生きてよかった、この学校でよかった。この職場でよかった。そう思える。この家族でよかったという実感ができる、そういう1日1日を積み上げていく人権学習を大事にしていきたいと思います。

3人のパネリストの仲間を支えられながら、本当に楽しい時間を過ごさせていただきました。無理強いして1番にしゃべっていただいたK先生、ありがとうございます。高校生、ありがとうね。零ちゃん、ありがとうございます。Y先生、本当にありがとうございます。夏から本当に楽しい時間を共有させていただきました。皆さん長時間ありがとうございます。これで終わらせていただきます。(会場より大きな拍手)

《司会者》

Aさん、パネリストの皆さん、本当にありがとうございました。閉会にあたりまして、鳴門市人権教育推

進協議会会長よりご挨拶申し上げます。

《鳴門市人権教育推進協議会会長 閉会あいさつ》

閉会にあたりまして、先生方に御礼を申し上げます。本当に毎年のことですが、この会がこんなに充実してできることを大変うれしく、また、誇りに思います。私は、県下でいろんな社会教育の中で、人権啓発について、人権教育について語ることがありますけれども、その中で、今、鳴門市では「人権尊重のまち 鳴門」をキャッチフレーズに啓発を進めておりますけれども、鳴門市はこんな教育があるんだ、こんな社会教育の場があるんだと、誇りをもって言うことができます。先生方のおかげでございます。本当にありがとうございました。

(マイクの向きを参加者の方に向けながら)会場に参加されている皆さん。今、鳴門は「人権尊重のまち 鳴門」でございます。どうか、皆さん方も、誇りをもって、鳴門市民として、今日の先生方の話の中にもたくさんありましたけれども、人間の思い、一人一人の思いをしっかりと、「部落差別おかしいやない。なぜそんなことが今あるんだ」ということを市民に語りかけてほしいと思います。

私は、今日の話の中で、一つだけ思い出した言葉がありました。子どもたちと一泊研修をする中で、教師が「あなたたちは一生懸命勉強しなければいけない」ということを、上から目線で話をします。そんな中で、あるお母さんがこんな話をしてくれました。いまだに忘れられません。お友だちに、「あなたたちね、今、今日ここで一泊で研修していることは素晴らしいことよね。差別をなくす、明るい世の中をつくっていくということは、素晴らしいことじゃないですか。誇りをもって勉強してね」というようなことを言ってくれました。

教師の、上からの言葉ではなくて、子どもたちにスーッと入っていった気がいたしました。そういうふうな語りができる教師になったり、また、そういう社会になっていきたいなと思っています。どうか、これからも、人権の教育、啓発についてですね。皆さんのご協力ご支援をお願いしたいと思います。本日は、たくさんお越しいただきましてありがとうございました。(拍手)

《司会者》

これより、Aさんとパネリストの皆さんが降壇されます。会場の皆さん、今一度盛大な拍手をお願いいたします。(会場より大きな拍手とともに登壇者が降壇するのを待ち)以上をもちまして、本日のフォーラムをすべて終了させていただきます。お帰りの際には、忘れ物などないようお願いいたします。また、アンケートは受付の回収箱に入れていただきますようお願いいたします。それでは皆様お疲れさまでした。ありがとうございました。お気をつけてお帰りください。